

印刷技術懇談会 2021年5月例会(第490回)
「プリンティングディレクターの仕事術」
 - 後世に伝えたい印刷の面白さやPDの役割・意義 -
 熊倉 桂三(くまくら かつみ)氏 ((株)山田写真製版所 プリンティングディレクター)

- 日時：2021年5月21日(金) 18:30~20:30
- 場所：オンライン(Zoom)による参加
- 講演要旨

今回の勉強会は、講演の前半で、熊倉氏が、以下の骨子でプレゼンテーションを行い、中程からは、印技懇の池田幹事長が、熊倉氏に質問し、氏がそれに答えて、内容を掘り下げ且つ掘り下げていくという進行形態だった。

- ✓ (株)山田写真製版所の紹介
- ✓ プリンティングディレクター(PD)の役割
- ✓ 製版ディレクション (製版が印刷の「心臓部」)
- ✓ 印刷ディレクション
- ✓ 人材育成に関して
- ✓ 印刷ビジネスの潮流の変化に対して
- ✓ 色分解の熊倉カーブに関して



まず、熊倉氏の経歴について。1947年東京生まれ。日本大学 芸術学部 写真学科に入学するものの授業に魅力を感じることができず中退。その後、凸版印刷に入社。ご本人は、てっきりスタジオでの写真撮影の仕事だろうと思っていたら、「写真製版」の部署に配属になった。氏は当時「写真製版」という言葉すら知らなかったとのこと。以来、59歳まで凸版印刷でPDとして活躍された後に、山田写真製版所に転職し、本年度14年目とのこと。現在74歳。

熊倉氏はPDという立場で全体をマネジメントしているが、印刷の最も重要な工程と位置付けている製版はご自身で行うとのこと。PDという職名の人間は日本にどれくらい存在するかは不明ではあるが、氏いわく、「自ら製版をやっているPDはいないのではないかと。同社の他のPDも同様に自ら製版を行っている。

凸版印刷でのPD時代、氏は著名なグラフィックデザイナー(亀倉雄策氏、田中一光氏、勝井三雄氏、永井一正氏 他)や写真家の作品を担当し、その過程で「鍛えられた」と語っている。彼らのリクエストを咀嚼する力、その気持ちを読み取るコミュニケーション力、それを印刷物として仕上げるための製版設計力、印刷でのインキや用紙の選択力、担当部門間の調整力などを身に付けることができた。このプロセスは、決して容易ではなかったはずであるが、「好きな仕事だったのでストレスは感じなかった」と淡々と述べている。

さて、59歳で山田写真製版所に移ってからは、富山の若手のデザイナー達や同社の若手社員に刺激を与えるために、凸版印刷時代の人脈をベースに、著名なグラフィックデザイナー達と一緒に仕事をする機会を作ったとのこと。また印刷物のコンペ(全国カタログ展、全国カレンダー展等)への挑戦を開始し、現在では常に上位入賞の成績を収めるレベルにまで到達した。この試みは、同社の社員に、一流の印刷の水準を意識させ、自信をつけさせ、自らの技術力にさらに磨きかけさせるという「向上と挑戦のサイクル」を形成するという結果につながった。これは氏の人材育成の考え方と方法を語る話とも言えるだろう。

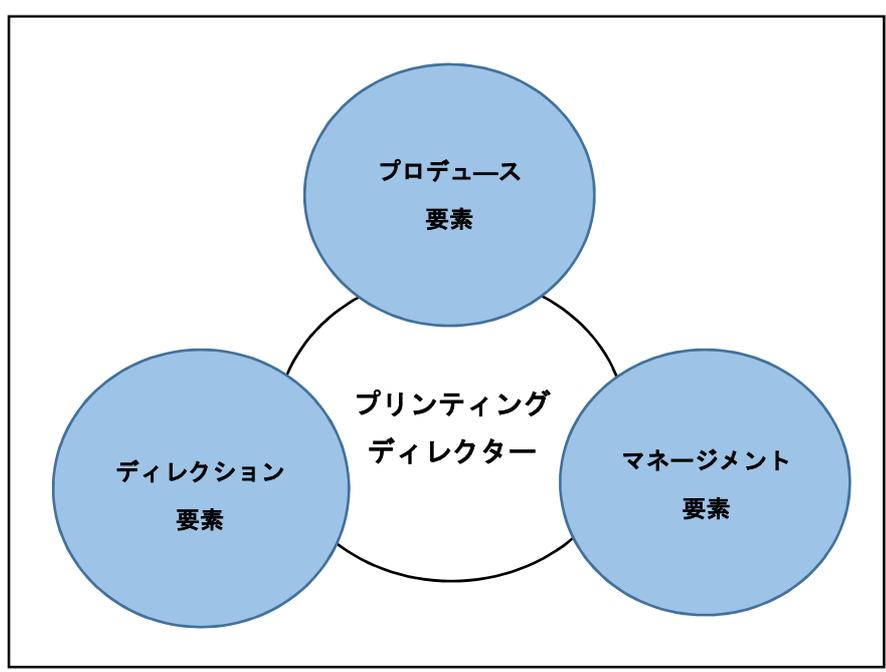
「愛」という誠に近い意味を持つ言葉を、熊倉氏は口にされた。プレゼンシートの最後のページには「『LOVE』 愛をもって臨むから、厳しく楽しく、そして仕事に取り組める」とあった。この「愛」という言葉に、氏が辿り着いた経緯や、その意味のとらえ方についてのお考えを聴きそびれてしまったが、氏の思いの中には「製版・印刷の技術」と同じ質量で、「愛」という言葉が存在するようにも感じられた。今回の講演タイトルに立ち返れば、それが「熊倉流PDの仕事術」のエッセンスとなるのかも知れない。

次ページ以降に、講演のポイントと思われる個所をメモの形で記した。

.....以下、メモ.....

- 株式会社山田写真製版所について(HP: <https://www.yppnet.co.jp/index.html>)
 - ✓ なかなか見ごたえのある HP である。その中には「グラフィックアーツ」や「芸術としての印刷」という文言があり、同社の印刷についての考え方を理解するために有用な内容である。
 - ✓ 代表取締役 山田秀夫氏
 - ✓ 富山に本社を置く総合印刷会社
 - 富山本社(製版、印刷、製本)
 - 東京本部(製版)
 - 新潟支店(製版)
 - 金沢支店(製版)
 - 長野営業所
 - ✓ 従業員数：166名(全社合計)
 - ✓ 製版の歴史が長い
 - 創立100周年特設サイトあり：<https://ypp100th.yppnet.co.jp/>
 - このサイトも興味深い。
 - ✓ 印刷を開始して約20年。以下、保有印刷機。
 - ハイデルベルグ 菊全10色機(日本海側では初めての導入事例)
 - ハイデルベルグ 菊全4色機
 - ハイデルベルグ 菊半4色機
 - ハイデルベルグ 菊全2色両面器
 - コモリ 菊半寸延び4色両面器

- プリンティングディレクターの役割
 - ✓ PD活動を支える3つの要素(下図)
 - ✓ この3つの要素を回転させていくこと



■ 製版ディレクションとは

- ✓ 最適な印刷設計を構築すること
- ✓ 以下を十分理解し整理すること
 - クライアントコンセプト
 - デザインコンセプト
 - 印刷コンセプト
- ✓ 印刷の5大要素に分解し、最適化し、再構築をすること
- ✓ 製版は印刷の中心でいわば「心臓部」という位置づけ
- ✓ **熊倉氏自らが製版を行う。「網点1%のこだわりを印刷で表現していく」**
- ✓ ここで同社の2つのノウハウについて少し語られた。
 - ① 熊倉カーブ(4種の色分解カーブ)について
 - ② ニス印刷用の「調子版」について

■ 「熊倉カーブ」について

- ✓ 山田写真製版所のノウハウ
- ✓ この色分解カーブ作成のきっかけ
 - 写真家篠山紀信氏からデジタルカメラのデータが持ち込まれた。
 - しかし、当時はデジタルカメラが出始めの時代で、そのまま製版するとディテールが全くでなかった。フィルム製版と同じような再現にはどうしたら良いかという社内の議論がきっかけとなり、熊倉氏の提案で色再現のカーブを作ることになった。
- ✓ 熊倉カーブについて
 - 熊倉氏から詳細は語られなかったが、カーブは4種類あるとの事 (K1~K4)
 - 筆者の推測ではあるがインキの種類についての言及があったので、使用インキ別のカーブかも知れない。また、線数別のカーブ、スクリーニング別のカーブ、あるいは「肌・人物」「ライト部中心の原稿の色再現」「シャドウ部中心の原稿の色再現」などのカーブかも知れない。

■ ニス印刷と「調子版」について

- ✓ 「半マットニス」を作るとのこと。(グロニス50%+マットニス50%の混合)
- ✓ 光沢ニス単体、あるいはマットニス単体という使い方ではなく、この2種類を混合する。
- ✓ ニスを印刷するときの版はベタ版(一般的にはこれが多い)ではなく、「調子版」で印刷する。
- ✓ ニスの使い方ひとつで印刷物に魅力をアップできる。
- ✓ 筆者の推測では、この「調子版」は網点で形成されたものと思われるが、詳細は不明。

■ 印刷ディレクションとは

- ✓ 安定した「高品質・高付加価値」を提供すること
- ✓ 工場内や印刷機の整理・整頓・清掃・清潔・躰の実施
- ✓ 各オペレーターの躰教育の徹底
- ✓ 「職人氣質」を教育する。
- ✓ 紙とインキを駆使して最適な印刷を作り上げること
- ✓ 熊倉氏が、山田写真製版に入った時、同社では、印刷機は動いてはいたが、印刷の基礎知識が十分ではなかった。
- ✓ 「良い印刷物を作る」という意識が欠けていたので、意識改革から行った。(5Sの徹底など)
- ✓ 同社では、当時「板取り」という手法も知られていなかった。
- ✓ 熊倉氏は今までに紙の開発にも関与した。以下その紙の銘柄

- エアラス(竹尾)
- 風光(竹尾)
- MTA+(エムティーエープラス)(竹尾)

■ 印刷ビジネスの今後について

- ✓ 2極化するのではないかというコメントあり
 - ① 少ロットは「デジタル印刷」へ
 - ② 差別化できる印刷(こだわりの印刷の道)へ (⇒山田写真製版所の得意とする分野)

■ 熊倉氏のOJT手法について

- ✓ 部下がある程度のレベルになったら、いっしょに顧客先へ連れていく。(自分で行ってこいというやり方ではない。)
- ✓ 熊倉氏と顧客とのコミュニケーションのやり方や、顧客からのニーズの引き出し方などを部下に見せて学ばせる。
- ✓ 部下に対しても、常に「ありがとう」「感謝の気持ち」は大切

■ 教育について

- ✓ 年1回、若手の勉強会開催(社内、社外)
- ✓ 金沢美術大学で「印刷の魅力」について教えている。

■ 印刷ビジネスと顧客対応についての考え方について

- ✓ データーのまま印刷してほしい顧客には、選択肢としてインターネットでの印刷発注という方法を紹介する。
- ✓ 同社で印刷をやりたいという顧客には「予算」を確認して、その範囲に収まる提案を行う。

■ その他

- ✓ 熊倉氏の愛用の目薬：「ピントケアEX(千寿製薬製)」
 - 印刷に携わる人間にとって目の健康は重要
 - 聴講者の一人から、年齢と共に、眼が衰えてきて、色の判断が難しくなると言われているが、熊倉氏は、目の健康に関してどのような対応を取られているかという質問があった。
 - 熊倉氏はその質問に答える形で愛用している上記の目薬を紹介した。